

(仮称) 西元町一丁目公園整備に伴う事前遺構確認調査について

1. 調査にいたる経緯

国分寺市では平成 14 年度に「史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画」を定め、長期的な整備計画を立案した後、平成 20 年度には「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画」で当面の整備課題について検討を行った。これら 2 つの計画に基づき平成 15～24 年度に実施した僧寺主要伽藍の発掘調査成果から、「伽藍中枢地区」（金堂・講堂・鐘楼・中門等）の整備工事を平成 23～令和 2 年度に施工し、国分寺市立歴史公園として供用開始している。また、令和元年度には今後の整備対象地となる「伽藍中枢部周辺地区」の基本設計を検討し、今後は「南門地区」⇒「北方・推定中院地区」⇒「塔地区」の順に整備工事を推進していく予定である。

そうしたなか、令和 4 年度は武蔵国分寺跡が国史跡として指定されて 100 周年の節目を迎えたことを契機として、市では「北方・推定中院地区」に含まれる都市計画緑地「国分寺緑地」内の公有地で緑地整備事業の検討を行うこととなり、武蔵国分寺にかかわる遺構の有無を確認するための発掘調査（事前遺構確認調査）を実施した（武蔵国分寺第 780 次調査）。

2. 立地・環境と調査の経緯

調査地点は国指定史跡地の北端部で、標高 70m をはかる国分寺崖線上の武蔵野段丘縁辺部に立地する。100 年前の大正 11 年に史跡指定を受けた約 1,000 m² の敷地で、その南西側に建つ国分寺薬師堂（安置されている木造薬師如来坐像は国指定重要文化財、建物は国分寺市指定重要有形文化財に指定）は、指定当時は天平期の堂舎跡地に建つ建物の可能性が示唆されていたが、昭和 31 年に甲野勇らが行った発掘調査で、伽藍地北限区画溝の上に建つ建物であることが判明している。さらに近年の考古学的調査では、付近一帯は武蔵国分寺を支えた庶民らが暮らす竪穴建物が数多く分布している様相も明らかとなっている（第 1 図）。ところで、当該地は昭和 40 年代初頭に国分寺市が公有化し、平屋のコンクリート造り建物 2 棟からなる保育園施設を建設したものの、平成 24 年度に市教育委員会が策定した「国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡保存管理計画（第 2 次）」では、施設を史跡地外へ移転させることが検討課題となり、その後、平成 28 年に施設は閉鎖されて建物も除却を済ませている。

そのため、事前遺構確認調査の計画にあたって、保育園の園舎が建っていない敷地の東側範囲を中心に 15m 四方の調査区（A 区）を設定して臨むこととした。調査は令和 4 年 8 月 2 日から着手し、古代の遺構が視認できる暗褐色土層（市内基本土層Ⅲb 層）上面で精査した結果、ピット状プラン 12 基と、茶褐色土を覆土とする縄文時代の土坑・ピット状プランを多数確認した。この状況を 8 日に文化庁・東京都へ報告し、敷地の西側部分にも追加トレンチ（B 区）を設定することにしたところ、12 日に古代の竪穴建物（SI848）が 1 軒発見された。

そして翌週 17 日、史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会（第 1 回）の有識者による視察を行い、コンクリート造りの園舎下部にも古代の遺構が残存している状況があることから、調査期間・費

用等の調整が叶う範囲でさらに調査区を東側へ拡張するよう指導を得た（C区）。そこでA区と接続する付近までC区を広げ、敷地の北端部でも小さなトレンチ（D区）を設けて敷地内全体で遺構の分布状況を把握することにした。

その後、11月17日に開催した第2回保存整備委員会では、遺構の分布・確認状況を報告し、調査成果に基づく公園整備素案を提示したところ、遺構の平面確認だけではなく時期の検討を行うよう指摘され、検出した古代の竪穴建物を全掘せず部分的なサブトレンチを入れることで、出土遺物から廃絶時期、さらにはカマド等の付帯施設の有無を探るよう指導を受けた。そのため、調査計画を再度練りなおし、夏季に調査した竪穴建物に対して幅1mのトレンチを3本設定して令和5年1月11日～2月1日に再調査を行った。

3. 調査成果の概要

まず、夏季に行った敷地の全面的な調査では、保育園建物除却工事等に伴う攪乱が随所に認められたが、遺構の性格が判明したものとしては近代の防空壕1基、古代の竪穴建物5軒・ピット1基、縄文時代の土坑2基・集石1基を検出した。その他、円形・楕円形プランを把握したのみで、遺構の詳細な性格を掴めきれないピット状のプランを多数確認している（第2図）。

近代の防空壕は北側の園舎（B棟）下部で発見された。北・南側に階段を伴い、西側に室を伴う構造で、室の西側奥壁付近は天井部が遺存していた。階段通路の南北延長は6.0m、幅1.0mで、通路中央部から西側へ室が展開する。遺物を伴わないため詳細な所産時期は不明であるが、過去に行われた市内の羽根沢遺跡でも類例があり、戦時下の防空壕かと思われる。崩落の危険性を回避するため天井部は取り除き、遺構は完掘後に埋戻しを行った。

古代の竪穴建物は、敷地南側範囲を中心に東西方向へ列をなすかのように5軒が並んで検出された（第3図）。西端のSI848は北側にカマドを伴い、遺構の西側は調査区の外側へと続いている。カマドを中心として南北方向に幅1mのサブトレンチを入れたところ、床面上に焼土が分布しており、焼失家屋とみられる。10世紀前葉の土師質土器坏が出土している。SI849・850・851は3軒重複しており、東西に幅1mのサブトレンチを設定し、各建物の床面まで検出して調査を進めた。3軒の重複関係は覆土の堆積状況や出土遺物から判断して東側のSI851が最も新しく、SI849とSI850は遺構の残存状況が悪いため明確にし得ないが、SI850よりもSI849が新しいものと判断される。SI849は一辺3.0m四方の方形基調の平面プランを呈し、カマドは東壁に構築されている（上半部はSI851によって壊されている）。SI850・851はカマドの形跡は認められなかった。SI849からは刷毛塗りを施す灰釉陶器皿、内面体部に油着が認められる土師質土器坏が出土し、9世紀後葉～10世紀前葉の所産であろう。SI850の遺物は少ないが、土師質土器高台付碗もしくは土師器台付甕と思われる底部片が1点出土している。10世紀もしくは9世紀以前の時期に比定される。SI851は覆土中から出土した平瓦が2次被熱しており、カマドの袖補強材として転用されていたものと考えられる。その他の遺物は土師質土器の坏類が主体で、10世紀中葉～後葉の所産と思われる。最後に調査区東端に単独で発見された大型の竪穴建物であるSI852

は、東西 5.2m×南北 3.4mの東西に長軸をもつ長方形プランを呈し、カマドは東壁に有する。三日月状高台を呈する灰釉陶器碗と土師質土器坏が出土しており、9世紀後葉～10世紀前葉の時期に比定されるが、工房の可能性を示すような遺物は認められなかった。そのほか調査区北側には、破碎した平安時代の須恵器甕を伴うピット状の遺構（P-1）1基が確認されている。

古代の遺構と同一確認面にて縄文時代の遺構も捉えることができた。出土した遺物から性格が掴めた遺構として土坑2基（SK3506J・3507J）と集石1基（SS117）がある。集石は中期前葉（五領ヶ台式期）の所産であるが、調査区内からは早期・前期の土器や石器も出土している。

古代・縄文時代の遺構ともに、保護シートの養生を施したうえで、埋戻しを行った。

4. まとめ

調査の結果、過去に行われた周辺での発掘調査状況を反映して、当該地も古代の集落域の一部を形成していたことが判明した。竪穴建物が密集して検出される範囲と遺構分布自体が希薄な範囲が明確に分かれ、利用目的に応じた土地利用の様子が明らかとなった。

調査区の制約から全容を捉えられた竪穴建物は少ないが、重複密集する遺構の分布状況から、繰り返し居住の場として土地利用されていた様相が認められる。とりわけ、東端で検出した竪穴建物 SI852 は遺物の様相から平安時代の所産と思われるが、同時代の建物としては大型であり、覆土を掘り上げていないため詳細な性格は判然としないものの工房跡の可能性も考えられる。

今後の整備にあたっては、古代（特に平安時代）において居住の場が展開していたことを踏まえた検討を要するものと思われる。